

家政学と博物館との関連

— 家政学の研究発表における博物館関連研究 —

Museum and Home Economics

山西 鈴子*

Suzuko YAMANISHI

抄録

本研究は、家政学と博物館との関連について、日本家政学会の研究発表要旨集に発表された論文のなかから、博物館に関連のあるものを選択、集計したデータにもとづいて考察した。

集計の結果、発表総数の約8.21%が、なんらかのかたちで博物館と関連のあることがわかった。

のことから、家政学研究と博物館との関連は言うまでもなく、家政学と博物館学についても、その相互の関連が注目される。

さらに、家政学部における博物館学開講の意義、およびその問題点についても若干の考察を試みたので、ここに報告する。

1. はじめに

現在、全国の多くの大学において博物館学が講じられている。昭和女子大学においても、1979年度から開講された。全国的に見て、博物館学が講じられている学部は多岐に渡っており、家政学部もその1つである。

家政学部における博物館学開講の必要性については、多くの理由が考えられる。しかし、この問題について、博物館学的な考察は、発表されていないので、筆者はこの問題について、研究を行った。ここに、今までに得られた結果を報告する。

2. 目的

2. 1 学芸員と学術の専門分野

博物館の学芸員の任務は、博物館法第1章第4条にお

いて、「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる」⁽¹⁾とされている。

この法律からも、博物館において、資料もしくは資料を扱う立場が、ある特定の学術分野に属するものであれば、学芸員はその学術分野に関する専門知識を備えていなければならない。そのため、学芸員は、大学学部において、特定の学術分野を専攻したことが、資格取得の主要な条件とされている。また、家政学と関連のある内容を扱う博物館においては、家政学を修めた学芸員が在職することが望ましい。

一方、家政学の研究を行うにあたって、博物館の資料を利用することも考えられる。その場合、家政学の研究者が、博物館学で講じられている知識を備えていることが望ましい。

この研究は、上記の観点から、博物館と家政学の関連を考えるというのが、その目的である。

2. 2 家政学会における研究発表と博物館

昭和53年度現在、日本国内の74の大学で博物館学が講じられている。⁽²⁾そのうち、家政学部においては5大学において開講されている。⁽³⁾

国内約1600の博物館のうち、家政学関連の資料を有し、その立場で機能している館の数は明らかではない。しかし、多くの歴史、民俗、科学等の博物館において、相当数のものが、上記に該当すると考えられる。

一方、家政学研究において、博物館資料を利用してい る例は相当数見受けられる。

* やまにし すずこ

昭和女子大学家政学部

SHOWA WOMEN'S UNIVERSITY

原稿受理：1980年2月5日

連絡先（勤）

〒154 東京都世田谷区太子堂1-7

（電話）03-422-5131

その家政学研究者の全国的組織として日本家政学会があり、その会員数は1979年12月現在4263名^{*}である。日本家政学会では、毎年1回、総会と研究発表会を開催している。

筆者は、この大会における研究発表に着目し、発表された研究のうち、博物館に関連のあるものの調査を行った。

*家政学会に問い合わせた結果

3. 方法

3. 1 研究の手順

研究は図1-1に示す手順で行った。

3. 2 資料の選択方法

日本家政学会の研究発表会では、講演要旨集が作られる。この要旨集は、600字程度の内容記述を付したものである。

経年変化を見るため、要旨集の初めて作られた第8回大会より、昨年行われた第31回大会までの計24回の大会の発表について調査を行った。

3. 3 タイトルによる選択

まず、各研究のタイトルを読み、関連があると考えられるもの、およびタイトルだけでは判断しにくいものを採択した。

選択の基準は以下の通りである。

- ① 博物館およびそれに類する施設の利用
- ② モノ資料（実物・模型・模造品等をさす）の利用
- ③ 文書資料（文献・図書・写真等をさす）の利用
- ④ 伝統的な行事、慣習等
- ⑤ 考古、歴史、民俗等
- ⑥ 他民族に亘る事柄

以上の観点により、関連があるとして採択した例を表3-1に示す。

3. 4 要旨による選択

タイトルにより採択した研究について要旨を読み、関連なしと判断された研究は除外した。

判断の基準は、タイトルによる選択の基準に下記の条件を加えることとした。

- ① モノ資料、および文書資料を利用した研究のうち、研究対象が明らかに1955年以後の事象だけに限られるものは除く。
- ② モノ資料、および文書資料を利用した研究のうち、1955年以前のもののうち、1955年以降との比

図1-1 研究の手順

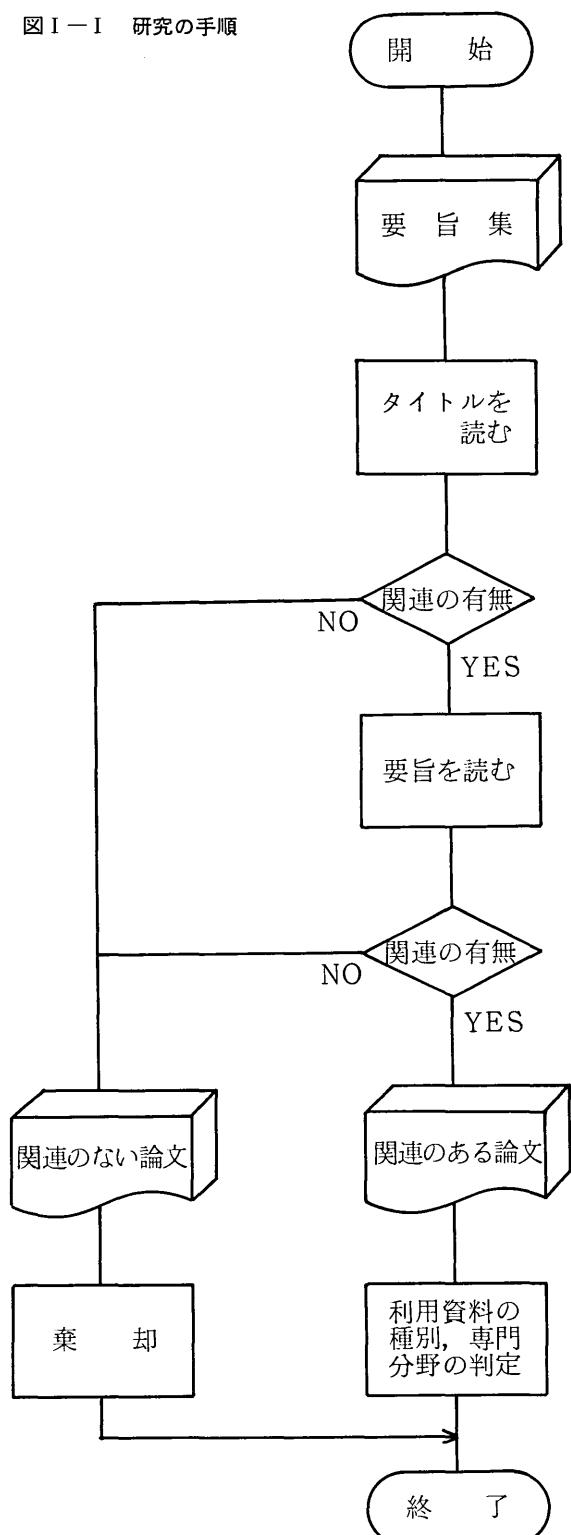


図3-2 要旨による選択の手順

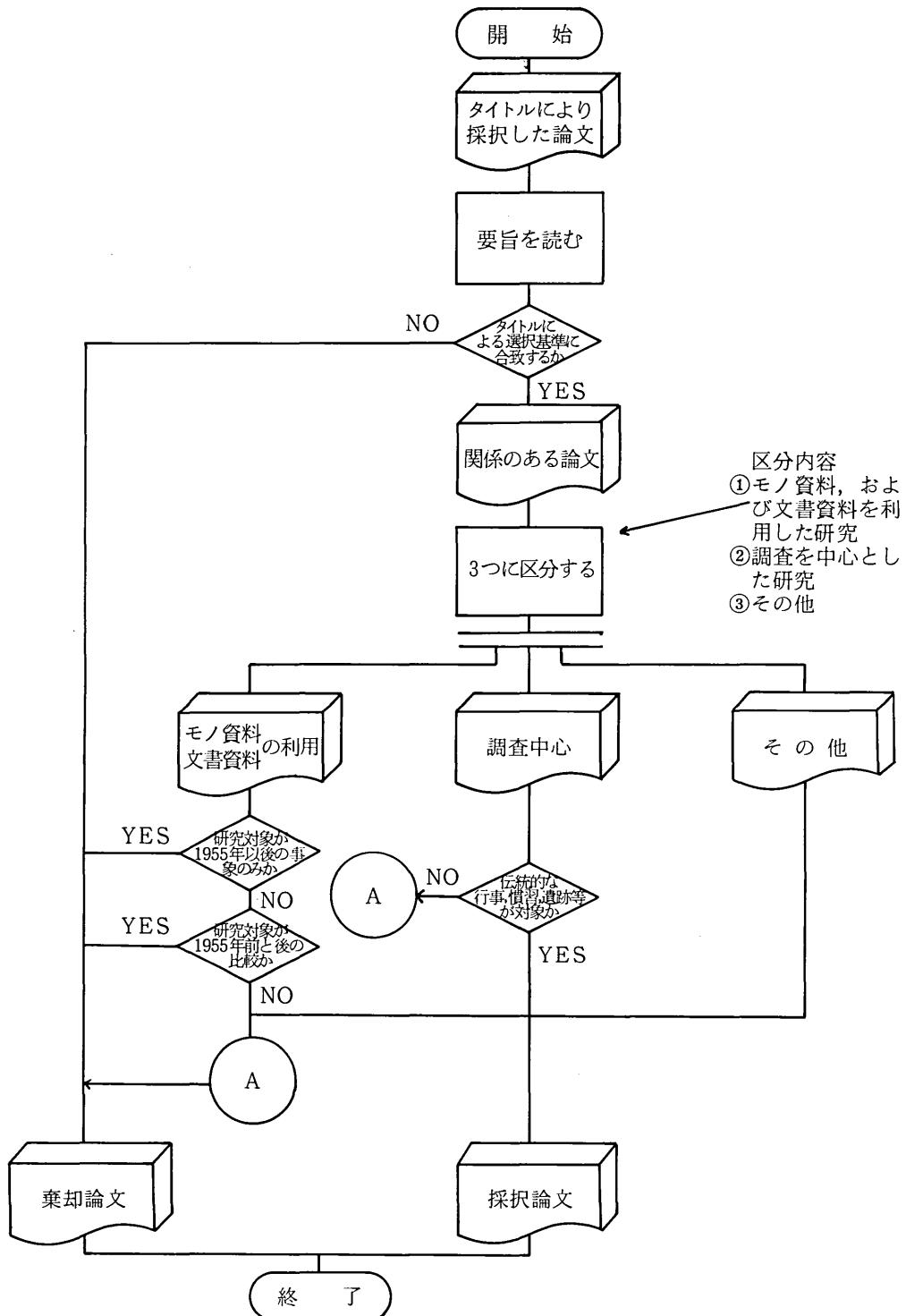


表 3-I タイトルによる選択の例

選択基準	タ イ ル	発表された大会数
① 室町時代の遺品、熊野速玉大社の御神服について（第一報）	19	
② 伊達藩の服飾（第2報） —伊達家の服飾遺品について(1)—	18	
③ 近世諸文献における合食禁例に関する調査研究	31	
④ 博多祇園山笠における祭衣服の形態と文様について	31	
⑤ 江戸時代の庶民調度卓、衣桁、坐臥の類	17	
⑥ 東南アジアから日本へかけてのもめん絣の共通性について	31	

較を目的とした研究は除く。

- ③ 調査を中心とした1955年以後の研究のうち、伝統的な行事、慣習、遺跡等を対象にした研究以外は除く。

この過程を図3-2に示す。

以上により選択した研究要旨の例を次に示す。

江戸小袖に施された水文様の一考察

実践女子大 細井 起能
細江 美子

1. 江戸小袖に施された水文様は、染織技術の発達と美意識の向上によって著しい発達を遂げた。小袖文様の構成は種々の題材をモチーフとして意匠化し多種多様となっているが、中でも水文様を中心とする作品は意外に多い。そこで今回は江戸小袖に施された水文様を研究対象として取りあげ、今日のきものの文様の動向を知る一端としようと思う。

2. 参考資料には、東京国立博物館、長尾美術館川島家、野村家、各所蔵の小袖、小袖裂、並びに当時のスタイルブックともいえる小袖雑形本、誰が袖百種、花小袖、小袖と振袖等を使用する。

代表作品として、浪流水菊文様小袖、長寿の水黒綸子地小袖、白綸子地流水菖蒲文様縫絞振袖、白地流水菊藤文様小袖、鼠縮緬地曙染郭公水車曳舟文様縫入小袖、紫綸子地浪に鯉文様小袖等を取りあげ、水文様の構成、色調、表現技法等の各期の相異点を比較明確する。

3. 山水及び水に花鳥を配した小袖の意匠は、当時代の全般を反映しつつ、特徴ある発達と変化を示している。それは元来我が国の生活環境や民族性を背景として生まれた日本独自のもので、今日のきものの文様が、これらの長い伝統を基調として意匠化されていることは明白である。

3.5 研究利用された資料の種別と専門分野

3.4により選択した資料は、食物・被服・児童・住居・その他の5つに区分した。分類の方法は以下の通りである。

- ① 第8回大会より、第19回大会までは、要旨集の分類が、食物・被服はそれぞれ独立しているが、他の研究についての分類方法は統一されていない。そのため、タイトルおよび要旨により、第20回大会以後に準じて、児童と住居に分類されるものをそれぞれ選択し、それ以外をその他とした。
- ② 第20回大会から第31回大会までは、要旨集に従い、食物・被服・児童・住居と分類し、それ以外をその他とした。

3.6 研究方法、および利用資料による分類

研究の方法、および利用した資料の種類により分類した。

分類の基準は下記の通りである。なお、A. B. C. D. Eは、表4-2中に用いた記号である。

- A. ①博物館、およびそれに類する施設を利用した研究
- ②モノ資料を利用した研究
ただし、文書資料と併記の場合も「A」に入れた。
- B. 文書資料を利用した研究
ただし、「A」以外の他の項の内容と併記の場合も「B」に入れた。
- C. 調査等により、行事・慣習等を扱った研究
- D. 研究方法が、A. B. C以外を中心とした研究
- E. タイトル、および要旨からは判断しにくい研究

4. 結果と考察

4.1 結果

専門分野別の集計結果を表4-1に、研究方法、および利用資料による分類の集計結果を表4-2に示す。

表4-1 専門分野別集計

大 会 回 数	食 物		被 服		児 童		住 居		そ の 他		合 計		%
	総 数	選 択 件 数	総 数	選 択 件 数	総 数	選 択 件 数	総 数	選 択 件 数	総 数	選 択 件 数	総 数	選 択 件 数	
8	47	1	29	3	4	0	5	0	14	0	99	4	4.04
9	37	1	55	7	5	0	10	0	12	0	119	8	6.72
10	53	0	60	1	3	0	4	0	19	1	139	2	1.43
11	48	1	81	13	2	0	7	2	26	0	164	16	9.76
12	42	1	80	13	3	0	7	1	19	2	151	17	11.26
13	30	1	60	8	4	0	3	0	18	1	115	10	8.70
14	67	0	89	7	8	0	14	0	27	0	205	7	3.41
15	52	1	80	7	8	0	10	1	33	1	183	10	5.46
16	65	1	82	7	3	0	11	1	29	2	190	11	5.79
17	60	0	103	13	6	0	8	1	28	1	205	15	7.80
18	97	1	100	12	13	0	2	2	35	3	247	18	7.29
19	111	4	111	17	13	0	20	1	44	5	298	27	9.06
20	112	4	155	19	9	1	16	1	40	5	332	30	9.04
21	110	3	136	24	15	0	15	2	38	4	314	33	10.51
22	109	0	150	20	8	0	15	1	34	1	316	22	6.96
23	117	3	135	21	9	0	18	3	39	3	318	30	9.43
24	113	4	133	21	11	2	22	4	36	2	315	33	10.48
25	115	3	143	16	13	0	20	3	56	9	347	31	8.93
26	127	3	143	19	14	0	22	1	62	14	368	37	10.05
27	112	1	134	12	14	3	27	0	52	8	339	24	7.08
28	129	5	156	18	6	1	25	4	49	7	365	35	9.59
29	139	5	145	20	14	0	28	1	46	3	372	29	7.80
30	155	6	161	22	12	2	27	3	43	4	398	37	9.30
31	195	8	181	21	10	1	28	4	65	4	479	38	7.93
合計	2242	57	2701	341	207	10	364	36	864	80	6379	524	8.21
%	2.54		12.62		4.83		9.89		9.26				

表4-2. 研究方法、および利用資料による分類

大 会 回 数	利 用 内 容 分 野	A. 博物館等の施設・モ ノ/資料				B. 文 書 資 料				C. 調 査 等				D. そ の 他				E. 不 明				
		食	被	住	他	食	被	児	住	他	食	被	他	食	被	児	住	他	被	児	住	他
8		0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
9		0	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
10		0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11		0	5	0	0	1	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0
12		0	9	1	0	1	2	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0
13		1	3	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0
14		0	6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15		0	6	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
16		1	6	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0
17		0	9	0	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
18		0	9	1	0	0	3	0	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19		0	16	1	1	3	1	0	0	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20		0	13	1	1	3	4	1	0	4	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0
21		1	16	2	0	1	5	0	0	4	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0
22		0	16	1	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
23		1	13	3	0	2	7	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
24		0	15	2	0	3	4	2	2	2	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0
25		0	12	3	1	1	3	0	0	1	2	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
26		1	11	1	0	1	7	0	0	6	1	0	4	0	0	0	3	1	0	0	0	1
27		0	11	0	0	1	1	2	0	5	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1
28		0	13	3	0	3	2	1	1	7	2	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0
29		0	15	1	0	3	4	0	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
30		1	15	3	1	4	5	1	0	1	1	0	2	0	1	0	0	1	1	0	0	0
31		0	15	3	0	3	5	1	1	2	5	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		6	238	26	4	31	70	8	6	46	18	4	21	2	6	1	5	23	1	4	4	4
総合計			274			161			43		14							32				
平均			4.30			2.52			0.67		0.22							0.50				

注 百分率に対する%である。

4. 2 考察

本研究の範囲において、家政学と博物館とのかかわりを、前記の手順により数値として求めた。これによると研究発表会の研究と博物館とは、全体として約8.21%が第3項目の「方法」3.3および3.4の「選択の基準」のいずれかの意味においてかかわりがある。

専門分野別にみると（表4-1参照）、被服と住居が高い数値となっている。経年変化については、規則性は見い出せない。

しかし、被服については、第8回大会より、毎年何件かの研究に博物館との関連が認められる。反対に、児童については、第20回大会まで1件もなく、その後も、0件ないし3件という結果である。食物は、24回のうち4回は0件である。また、それ以外の年も毎年何件かはあるが、専門分野別の総研究数に対する関連のあるものの割合は、他と比べて最も低い約2.54%となっている。食物が被服や住居に比べて低いのは、モノとしての保存が著しく困難であるため、当然のことと思われる。また、その他が比較的高い数値を示しているのは、家庭科教育、家庭経営、家族関係についての歴史を対象とした研究が多いことにあると考えられる。

さらに表4-2により、「方法」3.6のAに該当するものは、総研究数の約4.30%であり、これは博物館と明らかに関連がある。特に、住居、被服において、その傾向が著しい。博物館と関連のある研究の専門分野別の総数に対するAの専門分野別の割合は、住居約72.22%，被服約69.79%に及ぶ。これは、住居については、現存する住居、および町並等を調査した研究が目立っていたこと等によると思われる。被服については、服装史等において、実物としてのモノ、あるいはそれを所蔵している博物館との関係が深いことが、この数値の原因となっている。また、このA欄に児童がないのは、採択した総数が少ないとだけではなく、食物と同様に、モノとして残りにくいことと、食物で行われている「伝統的な郷土料理の調査」等に当たるような調査も行われていないためである。

要旨の範囲では、資料を所蔵している博物館等の名称が明らかでないものもある。又、表4-2のEは、“不明”としたが、この中には、おそらくAに入ると思われるものもある。このようなことから、要旨だけでなく、研究全体を調査すると、全体としても、あるいはAに入るべき件数もさらに多いことが考えられる。

5. 結論

「考察」で述べたように、家政学研究に博物館資料が利用されていることは明らかである。

資料の利用の仕方として、家政学研究者が、研究対象そのものとして利用する場合と、参考資料として利用する場合が考えられる。

前者の場合、言うまでもなく、博物館等の施設、あるいはモノ資料を利用しなくては、研究そのものが成り立たない場合が多い。しかし、このような場合だけでなく、参考資料として用いる場合にも、博物館を上手に利用することは、資料の収集方法、資料に関する来歴等の知見の利用、および取扱い等、家政学の研究にも有用である。さらに博物館を上手に利用するためには、博物館学を修めることが有効な方法であり、このことは博物館を家政学の研究という側から使い易くすることになると考える。

今回の調査において、博物館資料を利用した研究の大部分は、歴史、民俗等の博物館資料である。

これらの博物館に限らず、一般に博物館の利用者には家政学の研究者はあまり多くないであろう。これらの館を利用する一般の人達は、大部分、「昔の人の生活は」とか、「昔の人の芸術や技術は」という視点で資料を利用するであろう。しかし、資料を現在の生活を考えるという視点で利用するものは少ないと思われる。現在の生活を向上、合理化することは、家政学の重大な使命である。したがって、歴史、民俗等の資料を、単に歴史や民俗の視点からだけでなく、現在の生活と比較して考えるということは、他の学門分野以上に家政学の直接の問題であり、家政学の視点から資料を利用することによって現在の生活の向上、合理化に役立てる必要があろう。

現実に博物館のなかには、家政学に関する資料も相当多く、また、家政学の視点から利用可能な資料も多い。他の専門分野の博物館、たとえば理工学博物館においても、現実の生活に関係のある資料を持つ場合が多い。この場合、資料を単に技術の成果を知るだけでなく、生活の視点から利用することにつとめるべきである。今後、家政学の側からの博物館の有効な利用について、あるいは、博物館の改善についての研究が行われる必要がある。

一方、博物館においても運用効果を高めるために、家政学部で博物館学を修めた学芸員が在職することが望ましい。

およそ博物館における資料は、どのような資料も、その資料をできるだけ多くの観点から見、利用することによって、資料の価値が高まる。博物館に家政学の専門教育を受けた学芸員が在職するということは、明らかに家

政学に関する視点から資料研究が行われるだけでなく、より多くの資料を家政学的な視点から利用することとなり、資料の利用価値を生かすこととなる。

このことは、資料研究にとどまらず、資料の収集、分類、保管等にも言えることである。また、利用者に対するサービスにおいても、利用についての指導助言、展示方法、解説書の作製等において、より効果的に行うことができる。

しかし、現実の問題として、ひとつの博物館に多数の家政学を修めた学芸員を配置することはむずかしい。このため家政学を専門とする学芸員になる人は、家政学を広範囲に学んでおく必要がある。専門的知識を、さらに深めると同時に、家政学全般について自分で学ぶような知的好奇心を持ち、学ぶことのできる素地を教育しておくことが必要となる。これらの問題は、家政学という広い領域をもつ学の問題であると同時に、博物館学の側からの問題もある。

これらのことから、家政学研究の推進、および博物館の利用者に対するサービスの向上の双方から、家政学部で博物館学が開講されることは意義のあることであり、必要であると考える。

6. おわりに

今回、家政学会の研究発表の要旨集を資料として、家政学と博物館の関連を検討した。しかし、この研究をさらに進めるためには多角的な見方が必要となる。その方法として、

- ① 博物館の所蔵資料のうち、家政学の立場で研究、教育普及に用い得るものについて調査する。
- ② 家政学会の学会誌に掲載された論文等を利用する。こと等を考えている。

最後に、本研究に際し、特に御指導下さった、吉村典夫先生（東京農業大学）、松本昭先生（昭和女子大学）に深く感謝の意を表します。

文献

- (1) 「博物館学序論」、P. 223、加藤有次著、雄山閣出版、1978年5月
- (2) 「大学における社会教育主事・司書・学芸員関係科目開設状況」、P. 1、文部省社会教育部、1978年2月
- (3) • 同書、P. 263 ~ P. 266
 - 「全国大学博物館学講座開講実態調査報告書」、全

国大学博物館学講座協議会、1976年

- 「昭和53年度 全国大学一覧」、文部省大学局大學課監修、1977年

[本論作成の基礎資料]

- 日本家政学会第8回総会・研究発表要旨集、日本家政学会、1956年
- 同第9回（1957）、第10回（1958）、第11回（1959）、第12回（1960）、第13回（1961）、第14回（1962）、第15回（1963）、第16回（1964）、第17回（1965）、第18回（1966）、第19回（1967）、第20回（1968）、第21回（1969）、第22回（1970）、第23回（1971）、第24回（1972）、第25回（1973）、第26回（1974）、第27回（1975）、第28回（1976）、第29回（1977）、第30回（1978）、第31回（1979）